



眼鏡女史は
従順な雌豚

「んっ!んっ!
...どうだ佐竹...勃ってきたか...」

今、俺の机の下で傳っているこの女は
藤堂莉莎子女史だ。

社内ではやり手のキャリアウーマンで
通っている。



しかし、そのキツめな性格のためか近寄りがたいオーラのせいか、
長年男目照りが続いていたようだ。

そこで俺は飲み会などで積極的に近づき肉体関係に持ち込んだ。

飢えた女史はすごかった。

一度関係を持った後は中毒者のように俺のペニスを求めた。
今では、深夜とはいえ社内でチンポをしゃぶれという命令を
素直に受け入れる従順なセフレに成り下がっている。



ドキ

♡ちゅー♡

ドキ

♡ちゅー♡

♡

「ほら……！勃ったんじゃないか……？
勃ってきてるぞ……もういいんじゃないか？」

藤堂女史はかなり発情しており、我慢できないようだ。

「ふーん、もうちょっと丹念にしてほしいですが仕方ないですね。
ケツをこっちに向けてください」
「ああ……！」

女史は素直に従う。



「見てくれ、言いつけ通り
屋から下着はつけてないぞ♡」
藤堂女史はスカートを
たくし上げ、尻を掲げる。

するとそこにはパンストのみに覆われた臀部が露わになった。
「うわあ…もうぐしょぐしょじゃないですか。
どんだけはしたないんですか？」
「仕方…ないだろ。
屋から…ツクスのことと頭がいっぱいだったんだ…」
言いながら女史はもじもじと身をよじる。
少しでも快楽を得ようとするその姿は本当にあさましい。



俺は女史のパンストに
手をかける。
ビリビリと破くと
濡れそぼった秘所が
露わになった。

処理した陰毛が生えかけている。
「早く…早く入れてくれ…
欲しくて欲しくて堪らないんだ…」
もう少し焦らしたかったが俺のほうも我慢できなくなってきた。
亀頭を押し当てる。





「ッッ!!」
一気に奥まで突き入れた。もちろん生だ。
避妊その他は女史が行うことで、もし妊娠し俺は一切関知しないと
一筆書かせてある。
肉壁が俺の陰茎に
絡みつく。

ゆるそうな印象に
反してなかなか
締りが良い。
蜜は十分に
分泌されており、
抽送の妨げにはならない。

ハハハハハ
ハハハハハ
ハハハハハ

「あっ！あっ！あっ！あはぁ♡」
俺は力強く女史の尻を突き上げる。
女史は乱暴にされるのが好きなのだ。
派手に音がしているが、
今このフロアにいるのは
二人だけだ。
気にかけることはない。

それを繰り返すことで女史も
俺もどんどん昂ぶっていた。

「種えっ！
ザーメンッ！
ちようらいっっ!!」



「あ、あ、ああっっっ♡♡♡♡」
女史は汚い嬌声を上げる。
俺は女史の中に汚液をぶちまけた。

ドッ
ビュ
ドッ
ドッ
ドッ

A stylized graphic featuring large, bold, purple letters 'K' and 'E' with a small pink circle to the right. The letters have a gradient and a shadow effect. The background is white with a blue and white striped pattern on the right side.

「それじゃ帰りましょうか」
精を出し切った俺は陰茎を女史の中から抜く。

「ああ…」

女史はまだ陰唇を物欲しそうにひくつかせているが、俺の言うことには逆らわない。
彼女は従順な雌豚なのだ。

もういい頃合いだ。

俺が何を命令しても女史は従うだろう。

俺はこの肉の玩具を使って新しい遊びを始めることにした。



ラブホテルの一室。
俺は女史に目隠しをしてポールダンスのまねごとをさせている。



「ふふふ、どうだ？」

動画を見て少し練習したんだ。

プロ並みとはいかんが形にはなっているだろう？」

女史の言う通りダンスはそれなりに様になっていた。
なかなか体が柔らかい。

女史は俺の気まぐれな思い付きにも熱心に応える。
勤勉なことだ。
俺の顔に悪い笑みが浮かぶ。
俺はそんな彼女をこれから裏切るのだ。



「ハア…ハア…
もうダンスはいいだろ？
ここに…くれないか…？」
踊っているうちに
発情してきたのか、
女史は自分の性器を
愛撫し始める。

「いいダンスでしたよ。
興奮してきました」

適当に褒めつつも俺は隣にいる男に目配せした。
そう、ここには俺と女史のほかにもう一人いる。
俺の取引先の会社の社員、多田さんだ。



多田さんには女史の痴態が
写った写真を見せて今日ここに誘った。
女史は多々さんが
いることを知らない。

そのために女史には目隠しをし、
多田さんには
今までしゃべらないようにしてもらっていた。
俺は多田さんに目配せをする。
今から多田さんに女史を抱いてもらうのだ。



多田さんは舌なめずりをし、女史に覆いかぶさる。
腹の下の肉棒はすでにそそり立っていた。

ー

ガ

「？」

何かいつもと違うな？」

女史は違和感を感じたようだ。

目隠しをしても分かる物なのか。

そういつつも女史は多田さんの肉棒を受け入れた。



「ふふっ、今日はなんだか優しいな」
多田さんはゆっくりと陰茎を挿入する。
俺と違って遠慮があるのだろう。



「いつもみたいに乱暴にしているんだぞ。
お前もその方が好きだろうっ？」
女史は暗に注文する。

多田さんはその注文を聞き入れ、強く腰を振り始めた。

「はっ!はあん♡
なんか!いつもと違うけど!
こういうのいいな♡」

フッ

普段と違うといいつつも女史はご満悦なようだ。
そろそろか。
俺は物音を立てないようにゆっくりと女史の背後に回る。
そして…



「なっ!」

目隠しを取り払われた女史の顔が驚愕の色に染まった。



そりゃそうだ。

後輩かと思っていたら、見知らぬおっさんが腰を振っていたのだ。

「ぐふふ、お初にお目にかかります藤堂さん。
私、〇〇商事の多田と申します。
今回お招き頂きましてありがとうございます。
ご期待にそえるかどうかわかりませんが精一杯尽くしますぞ」

「あ、はい」

やっと口を開けた多田さんと違って、
女史のテンションはただ下がりがた。

この状況に頭が追いつかないのかもしれない。

「大事なお客様なんで粗相のないようにしてくださいね」

俺は女史に噛んで合ひように言い聞かせた。



「佐竹君にあなたの痴態写真を見せてもらってから、
この目を心待ちにしておりました。
あなたを想ってセズリこく毎日でした」



「あ、ありがとうございます...」
女史はまたどういふ対応をするべきか混乱しているようだ。

「ああ！しかし、実物は素敵だ！
想像以上のおまんこだ！
とろけるようにあつく柔らかく、
それでいてしっかりと絡みついてくる！」

多田さんが最低の言葉で女史をほめそやす。
「…ああっ！ああんっ♡

ありがとうございます多田様♡

私の、莉莎子のおまんこを存分にお使いください♡♡」

女史はするべきか決めたようだ。外面用の仮面を被る。

それによって下がっていたテンションがどんどん上がっていく。



「おーっおーっ出してっかっかっ」
「出してっ！腔内に出してっだっだっ」
双方の昂ぶりが頂点に達する。



「はああああんっっ♡♡♡」
女史は甲高い声で鳴いた。

「また今度もよろしくお願いしますよ、ぐふふ」
「はい、お待ちしております、おります多田様♡」
数回の情交が終わり、俺と女史は部屋から多田さんを見送る。

十分に多田さんが去る時間をとった後、女史は俺を睨みつけていう。

「おい、どういうことだ！」

「どういうこととは？」

「私に他の男の相手をさせたことに決まってるだろう！」
俺はにやりと笑う。

「お嫌でしたか？その割にはずいぶん乱れていたようですが」

「そ、それは…」

「俺には先輩の欲求が手に取るようにわかります。

なあに、悪いようにはしませんよ。

俺に任せてください」

「……」

女史は唇を噛みながら肯定とも否定ともつかぬ表情で俺から目をそらした。



仕事の帰り、俺と女史は人気のない公園にいた。

「お前にこんな趣味があったとはな」

上着を脱いだ女史のシャツの上には荒い縄が食い込んでいる。ここへ来る途中トイレに立ち寄り、俺が縛ったものだ。

「嫌いですか？」

「いや、こういう趣向も中々…」

軽く俺を睨んでいたが、別に嫌でもないらしい。



「じゃあ、しばらく歩きますか。
人が来たら上着を着ていいですよ」
「ああ」

軽い羞恥プレイを楽しんだ後、ホテルにしけ込むという手筈になっている。
もちろんそれだけで終わらせるつもりはない。



「少しドキドキするな」
「そうですね」

俺たちは公園を一周した。
そこそこ大きな公園だが郊外にあるためか誰ともすれ違わなかった。
人がいたら中止しようと思っていたが大丈夫なようだ。
今日のメインイベントを実行に移すことにする。



「ここに立ってください」
「？」
「どうか」

女史を誘導し、街灯の下に立たせる。
疑問に思いつつも素直に従う女史。
「じゃあ、この柱を抱いてください」
「わかった」
街灯の柱を抱いた女史の手を取り、
懐から手錠を取り出す。
そして…



「あっ! コラッ! 何をするっ!」
両手に手錠をはめ、女史を街灯に拘束する。



「ちょっと待てり！置いて行くつもりじゃないだろうな！」
「そんなことしませんよ。」
それより大きな声を出さないでください。
人が来るかもしれませんよ」

「くうっ…！」

驚き、わめいていた女史は
人に見られる可能性を指摘され静かになる。

「…どうするつもりなんだ」

「ここで一発キめるつもりです。」

手錠は俺が鍵を持ってるので逃げられませんよ。

大人しくしてください」

「お前なあ…」



「さっさと済ませろよな」
「言われなくても」
「んくっ…」

俺は半勃起状態のペニスを女史の中に挿入する。



俺はゆっくりと腰を振る。
「は、はやくしろと言っててるだろ」
「まあまあそう慌てずに」
「見つかったらどうするんだ！」

女史をからかっているうちにどんどん怒張してくる。
やがて俺の肉棒はいつもの最大サイズへ成長した。

「どうです？これがほしかったんでしょ」

「は…んっ♡」

アブノーマルな状況にもかかわらず、女史も感じ始めたようだ。

フツッ

フツッ



俺はリズムミカルに腰を打ちつける。
「どこが！気持ちいいですか？」

「子宮う…子宮っ！」

奥までっ！届いてるうっ♡」

歓喜をかみ殺したような声が堪らない。

俺は腰の運動に一層力をこめた。



ゾクゾクとする感覚が太ももから下腹部へと昇ってくる。

「出す！出しますよっ！」

「来て！来てちょうだいっ！」

「私の中に出してえっ♡♡」

周囲に憚らず淫猥な調子で女史は叫ぶ。
俺はとうとう我慢できなくなり。





「はあはあ…
さっさと退散しましょうか」
「も、もう一回やっていけないか？」
「本気ですか？」

女史の大きな嬌声のせいで、
周りに人がいれば気づかれただろう。
警察を呼ばれてもしたら面倒なことになる。
「帰りますよ」
「あんっ♡」
俺は女史の尻を一回叩き、後始末をした。



ペチンッ

「はあ…」

最近残業続きでお疲れの様子、藤堂女史。この時期は毎年課全体が忙しくなる。

「どうです？今日はもう上がりませんか。根を詰めても仕方ないでしょう」

「佐竹か…」

「そうだな、今日はもう切り上げよう」

「おごりますよ」

俺は女史を連れ出した。

駅を降り、団地に入っていく俺たち。

「ここ店か？大きいけど民家じゃないのか？」

「そうですよ、今日パーティーがあるんですよ」

「楽しんでいきましょうよ」

「奢るってこのことか？」

でも、私が来ていいのか？

何のパーティー知らないが私は部外者だぞ」

「みんな歓迎すると思いますよ、さあさあ」

躊躇、というより訝しんで足を止める女史を背中を押して強引に入らせる。

パーティーは主役がいないと始まらない。

玄関を開けると楽しげな話し声が聞こえる。
俺たちは廊下を歩きリビングに入った。

すると、

「おおお！」

「ひっ！」

男たちが野太い歓声を上げる。

みんな全裸だ。

女史はその様子を見て短い悲鳴を上げた。

「Tさんだ！」「本物だ！」「ほんとにでけえ！」

男たちが女史に群がる。

「おい佐竹っ！どういふことか説明しろっ！」

男たちから距離をとり、

掴みかからんばかりの勢いで女史が俺に詰め寄る。

「まあ落ち着いてください、今日はとある会員サイトのOFF会なんですよ。

これです」

俺はスマホでそのサイトを表示し女史に見せる。

「淫乱雌豚年増女の痴態…ってこれ私の写真じゃないか!!

何でこんなものが！」

「最近時間見つけてサイトの運営してましてね。

最初文章だけだったんですけど写真つけたら閲覧数がうなぎ上りですよ。

それで会員制に移行しまして、今日会員の皆さんでOFF会の運びとなりました」

「消せ！今すぐ消せ!!」

激怒してスマホを取り上げようとする女史。

取り上げてどうするつもりなのか？意味ないのに。

混乱した女史とじゃれていると、
女史を後ろから羽交い絞めにするものがあつた。

「落ち着いてください」
以前女史と
セックスしたことのある多田さんだ。
この場所の提供者でもある。



「はな、離してくださいっ…!」
「今日はみんなあなたのために集まったんですよ。
それなのにそんな不機嫌でどうするのです。
機嫌直してください」

そういつつ、多田さんは女史の胸を揉む。
中々最低だ。



「嫌ッ……！」

「まあ、そう言わんと。俺らにもサービスしてくださいよ」
別の中年男が女史の体に手を回す。
女史はそのまま抵抗できず引き倒され……。



「あ、あなた達、これは立派な婦女暴行ですよ！
今なら通報しないであげます！」
あっという間に裸に剥かれた女史が
男たちにむかって強がる。

「ぐへへ、そんなこと言っても
体の準備は万端って感じじゃ
すぐにでもチンポがぶち込めそうだぜ」
「あんただって今日のこと期待してたんだろ？」
男たちは演技か何かだと思ってるようだ。
通報させないよう屈服させる必要がある。



「お、俺サイト見た時から
この乳首にむしゃぶりつきたかったんだ」
「きゃあっ!」
辛抱堪らんといった様子の男の一人が
女史の乳房に吸い付く。

「俺はこっちだ、へへへ」
「んっ!」
別の一人が秘裂に舌を這わし始めた。

イクッ

フ
チ
ュ
ッ

「んっ……くっ……はあっ!!」
観念したのか女史は大人しくなり、
代わりに甘いうめき声を上げ始めた。

「想像通りの声だぜ、こんな声をイメージしながらシコったもんよ」
男の一人が自らの股間をこすりながら言う。
「んぷっ……!はあっ、もうぶち込むぜ!」
股間をしゃぶっていた男が態勢を変え、そして……

ペロ
ペロ

ズズ

レロ
レロ



「一番乗りー!」
「くあっ!」
男の二物が女史の中に侵入する。
「俺のも抜いてくれ姉ちゃん!」
「俺も俺も」
他の男たちの男根が押し付けられる。
「ちょ…待…んっ…」
口に押し付けられた
男根のせいで息がしづらいようだ。

ズブズ



やがて諦めたように目の前の男根を舐め始める。
「レロ……ん……チュッ」
頭が上下してやりたくそうだが
器用に奉仕している。
「やっぱり好きもんだな姉ちゃん」
「早く代わってくれよ」
「こっちの緩急も中々だぜ、
すぐ出ちまいそうだ。
……うっ！」

アッ
アッ
アッ

イッ
イッ
イッ

イッ
イッ
イッ



「でちまった…」
「ほら！早く代われ代われ！」
手で扱ってもらっていた男が交代を要求し…
……

クッ
ドイ

女史は、短い間に3回中出しされ、
5回精液をぶっかけられていた。



「おっおっ？」

積極的になってきた姉ちゃん」

女史は態勢を変え、男の一人の男根にしゃぶりつく。

「じゃあ後ろもらいっ！」

最初に中出しした男が女史の後ろをとった。

さっきまでの受け身的な動きと違い、女史は積極的に腰を振っている。



「ちゅぽっ…んっんっ…ぷはぁっ！
もっと…
もっと強くして」

ズ
ン
ズ
ン

キラッ

フェラの合間に女史は後ろの男に要求する。
体に火がついたようだ。

「へへへへ！
おらっ望み通り強くしてやるぜ！」
そういうと男は乱暴に腰を振り始めた。



あれから男が交替していき、さらに4回中出しされている。「もっと!もっとちょうだい!頭の芯が変になってきちゃったのおっ♡♡」最初嫌がっていた態度はどこへやら、女史はそういうと、鬼気迫る様子で男の陰茎にしゃぶりつく。



「んぐッ!!」

どうやら普通にやってたんじゃと満足いただけなようだな。

おい、あんた手伝ってくれ!

フェラを受けていた男は女史の頭を引きはがし、俺に手伝えという。そして...



「あぁっ！すごい♡
前と♡後ろから♡
おかしくなっちゃう♡♡♡」
男は前の穴に挿入し、俺は尻の穴に挿入した。
「嬉しいですか先輩。
前後から犯されて悦ぶなんてとんだ変態ですね！」
「いわないでえっ♡♡♡」

ズ
ブ

ズ
ブ
ブ



「はっ♡はっ♡はっ♡はぁんっ♡♡」
理性が吹き飛んでいるのか
始終甘い嬌声をあげる女史。
「おらっ!どっちがいいんだ?
前と後ろどっちがいいんだ!」
「どっちも♡どっちもいいいんっ♡♡」



これは負けられないと女史のアナルの弱い部分を突く俺。
経験の差で俺に分があるはずだ。
前の男も負けじと突きまくる。
女史の肉越しにフェンシングでもしてる気分だ。
そのかいあってか女史は感じまくってるようだ。
「後ろがいいって言わないと、もうセックスお預けですよ」
「あ、ずりい！」
「いやあっ♡♡」



「アナル♡アナル♡ケツの穴ア♡♡♡
お尻まんこのほうがいい♡♡♡♡♡
……んっはあああああ♡♡♡♡♡
しゃべっているうちに昂ぶりが頂点に達し、
女史は絶頂した。
「んぐっ!」「ぐっ!」
その際に強く締め付けられ、俺たちもあえなく射精する。



「はあ♡♡」
女史は幸せそうに前後の穴から精液を垂らす。
それからも俺たちは金玉が空になるまで射精し、
翌日は無理やり有休をとった。

数か月後。

「どうだ妊婦を犯す気分は？」

散々生で中出しされていた女史は
腹が膨らんでいた。
年齢も年齢なので
産むことにしたようだ。

「きっとお腹の子も先輩に似てドスケベに育つでしょうね」
ペースは落ちたが今でも肉体関係は続いている。
腹の子も半々の確率で俺の子だろう。
だが、結婚しろとか責任とれとは言われていない。
まあ、言われない様あらかじめ約束事を取り決めていたのだが。



「実は子供が二人欲しいんだ。
親子二人じゃ子供が寂しいだろう？」
「腹が空になったらまた孕ませてあげますよ」
赤ん坊が生まれたら顔ぐらいは見に行つてやろうと思う。

終わり



















































































